

Q2 アトピー性皮膚炎と食物アレルギーとの違いが分かりません。

A2 この2つは本来は別の病気ですが、乳幼児期にはしばしば同時にみられます。

アトピー性皮膚炎は、皮膚の角質細胞同士をくっつけるセメント様物質(セラミド)を構成するフィラグリンというタンパクの異常です。皮膚の角質層ではセラミドで細胞のすき間が埋められていますが、アトピー性皮膚炎の患者さんではセラミドの形成が悪く、すき間だらけで皮膚の水分が保持できずカサカサ肌になる疾患です。皮膚を保護するバリア機能が低下し、細菌が繁殖したり、ダニのふんとか食べ物のカスなどが入り込んだりしやすくなります。刺激でかゆみが生じ、かきむしることによって炎症が起こり、その結果湿疹が生じます。

一方、食物アレルギーは食物の中の特定のタンパク質に反応してIgE抗体を作り、さまざまな症状を引き起こす病気です。

アトピー性皮膚炎と食物アレルギーとは本来全く別の疾患です。世間では、アトピー性皮膚炎であれば食物アレルギーが原因だと誤解されています。正しい診断を受けずに、むやみに卵・牛乳、小麦・大豆、

果ては米などの食事制限をされています。

確かに乳児期のアトピー性皮膚炎の患者さんでの食物アレルギーの頻度は、一般の子どもたちより際立って高率(60～70%)であるのは事実です。年齢が上がり学童期になると、合併の割合は減っていきます。

アトピー性皮膚炎の症状がある場合は、皮膚の炎症を抑えることが大切です。皮膚の状態を良くすることで、皮膚からの感作を防ぎます。その上で、食べると明らかに症状が現れる食物がある場合には、それを除去します。

アトピー性皮膚炎の原因は食物だけではありませんので、どんなに食物除去を徹底してもそれだけで症状が改善するとは限りません。

逆に、生まれつき皮膚が弱いドライスキンの赤ちゃんに、アトピー性皮膚炎の症状が出る前からスキンケアを徹底することで食物アレルギーの発症を予防できる、という研究結果が報告されています。

はたちの献血キャンペーンにご協力を!

献血者が減少しがちな冬期は、輸血用の血液不足が起きやすい季節です。このため、熊本県では1～2月の2カ月間、成人式を迎える「はたち」の若者を中心に多くの県民の皆さんに献血の呼びかけを行なっています。あなたの温かい気持ちを分けてください。

主催 熊本県 日本赤十字社熊本県支部

10代、20代の若者の献血者数が年々、減少しています。はたちのあなた、一度、献血体験を試みてね。



●母子健康手帳の交付

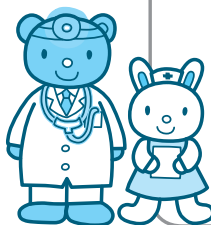
保健師が、妊婦さんの体調などを聞きながら母子健康手帳の使い方や妊婦健康診査について説明を行います

とき 平日、午前8時30分～午後5時

ところ 健康づくり推進課(西合志庁舎)

※健康育児相談でも交付しています。日時などは31ページのお知らせカレンダー、健康づくり事業計画表をご覧ください。

持参する物 印かん、医療機関から発行された妊娠届出書



●熊本県小児救急電話相談事業

相談時間

毎日・夜間

午後7時から午前0時

☎#8000

(ただし、ダイヤル回線・IP電話・光電話からは☎364-9999)

食物アレルギーへの正しい理解を

まつもとこどもクリニック 松本眞一院長



Q1 保育園に登園させるので、何が食べさせられて何を食べさせたいのか血液検査で分かりますか?

A1 残念ながら血液検査だけではわかりません。食べたときの本人の症状が重要です。

食物アレルギーの補助検査として、IgE CAP RAST(卵白・牛乳・小麦・大豆などによる食物負荷試験)という血液検査をしばしば行ないます。この検査は、特定のアレルゲンのアミノ酸配列を認識するIgE抗体ができているかどうか(感作)を調べるものです。

IgE抗体が陽性に出ると、陽性反応が出た食物をすべて除去しなければならないと考えてしまいがちです。しかし、この検査は「アレルギーかもしれない」という候補を調べる検査であって、この検査結果だ

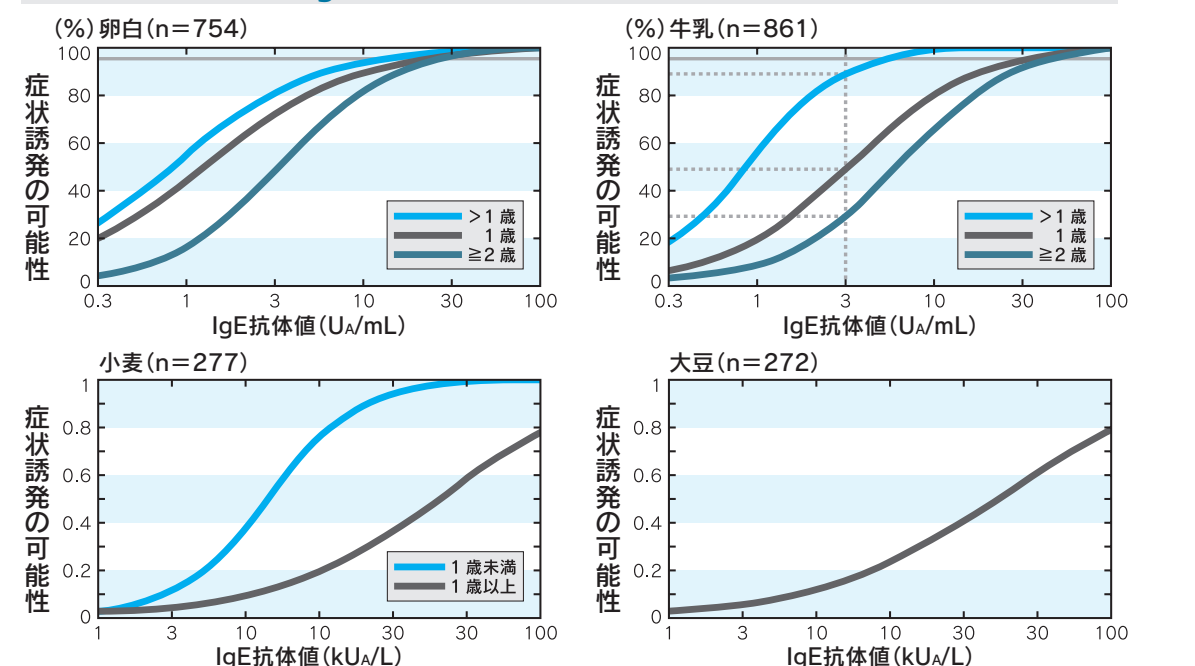
けを根拠に食物除去をするのは誤りです。

極端に言えば、この値がどんなに高くても、食べても症状がないのであれば食べ続けても構いません。『IgE抗体の陽性率と食物アレルギーとは、必ずしも同じではありません。』

このことは非常に重要です。

下のグラフは、卵白・牛乳・小麦・大豆に対するIgE抗体の値と、食べた時に症状が現れる割合を調べたものです。

IgE CAP RAST 値と症状誘発の可能性



いずれもIgEの値が高くなると症状が起こりやすくなっています。卵白・牛乳では、100の場合にはほぼ100%症状が起こります。中間の値では、症状が出る人・出ない人が混在しています。小麦や大豆では、100の値でも症状が出ない人が20%以上みられます。

逆に、卵白や牛乳では0.3の陰性の値でも、食べたから症状が出る人が0歳児では20%以上みられます。

以上のことからIgE抗体検査はあくまでも目安であり、実際には食べたときの本人の症状が一番大事だということが分かります。